

シュガーテイルへようこそ1

午後五時を少し回った頃、喫茶店「シュガーテイル」の扉が静かに開いた。浅葱優がレジ横のテーブルで伝票整理をしていると、軽やかな足音が近づいてくるのが聞こえる。

顔を上げると、入口に立っていたのは背の高い若い男性だった。濃紺のスーツに白いシャツというシンブルな装いだが、どこか上品で、日常には見慣れないような空気を纏っている。

男の目が優を捕らえると、その唇がかすかに笑みを浮かべた。

「こんにちはマスターは？」

男の声は柔らかく、けれど響くような低さを持っている。

「……あ、お待ちください」

優が少し戸惑いながら答えると、男性が近づいてくる。その一步一步が何かを確信しているような、余裕に満ちている仕草だった。

優美で自信に満ち溢れたオーラに戸惑っていると、カウンターの奥のドアが開きオーナーの安藤圭司が顔を見せた。

「やあ御堂君、来たね」

「はい。今日からよろしく願います」

安藤と親しげに話す男性にさらに戸惑っていると安藤が優の方を振り

向いた。

「優君、彼は御堂愛佳君。夕方からこの店でバイトをすることになったんだ。よろしく頼むよ」

「バ、バイト？……えっ？」

御堂が穏やかに頷くと、優の頭の中に「何かがおかしい」という直感が浮かんだ。普通のバイトがこんな高級感あふれる御曹司然とした男にお願いされるものだろうか、と。

「御堂君は日中はサラリーマンをしているんだよ。夕方からなのはそういうことから」

安藤が優に視線を向けると、優はぎこちなく笑った。

この喫茶店は表の顔で、裏は探偵事務所だ。

おそらく御堂もそのことを知っているのだろう。御堂がうまく立ち回って自分の仕事が減ればいいと、その時はそう思っていた。

シュガーテイルの営業が落ち着き、夜の帳が降り始めた。安藤が一息つこうとカウンターを片付けていると、携帯が震えた。

ディスプレイに「秋月凜」の名前が表示され、安藤はボリボリと頭をかいた

「……なんだ、こんな時間に」

安藤は小さく溜息をつきながら通話ボタンを押す。

「もしもし、秋月か。どうした？」

『あ、安藤。ちょっと頼みがあるの。今からそっちに行ってもいいか

しら？」

凜の声には、いつになく真剣な色が混ざっている。安藤はそれだけで察した。これはただの世間話や冗談ではないと。

「構わないよ。ちょうど閉店時間だし、他に客もいない」

『よかった。すぐに行くわ』

電話を切ると、安藤はため息をつく。この業界で秋月凜がわざわざ直々に頼みを持つてくるのはそう軽々しいことではない。

ほどなくして、ドアベルが鳴り、背の高い女性が店内に入ってきた。

彼女の目には冷静さとともに、鋭利な光が宿っている。

「久しぶりね、安藤」

「いらっしゃい、秋月。相変わらず厳しい表情だな」

凜は軽く口元を引き締めてから、安藤の前に腰掛けた。そして、鞆から資料を取り出し、テーブルに置いた。

「実は、ある企業が軍事転用できる技術を不正に流そうとしているという情報を入手したの。その相手が……例のチャイニーズマフィア『楊弦月』よ」

その名前に安藤の顔が一瞬引き締まる。

楊弦月——香港を拠点に活動する、富豪の中華マフィアである。情報では、彼が暗躍し始めたのは最近だが、その動きの速さと、正確さが既に業界では知られている。

狙ったものには金を惜しみなく注ぎ、敵対するものに自ら手を使わず潰す。そんな楊が日本で仕事をするとは、ずいぶん物騒な時代になっ

たな。と安藤が肩をすくめた。

「……楊弦月が関わっているとはな。で、秋月は何を望んでいるんだ？」

「彼の次の取引が、日本国内で行われるわ。軍事関連の技術を持ち出して捌こうとしているらしい。そこで、あなたの探偵事務所では何かできないかと思って」

凛の目は真剣そのものだった。安藤は資料に目を通し、眉をひそめる。

「……この内容が本当なら、相当厄介な案件だな」

「ええ。でも、あなたなら……それに、優君がいれば何とかなるんじゃない？」

秋月の言葉に、安藤の脳裏に優の顔が浮かぶ。美貌に恵まれながらも、

少し生きづらそうにしている不器用な青年の姿が。

「確かに……彼の外見は大きな武器だ。けど、あの子がなんで……？」

「実は楊のタイプが優君でドストライクなのは間違いないの。安藤、お願い。あなたのところ以外に頼れる場所がないの」

凜の真剣な表情に、安藤は小さく息をつき、覚悟を決めたように頷いた。

「分かった。優を使って、できるだけのことをやってみよう」

翌日、安藤は優を呼び出して今回の依頼について説明を始めた。公安の依頼であること、そして潜入任務の詳細。

優は戸惑いながらも、安藤の真剣な目を見て、覚悟を決めたようにう